

一三八〇〇〇〇〇〇〇ねん ぼくのたび

浜松市立浅間小学校 三年 天野 清正

ぼくがこの世に生まれて、八年が経った。

しかし、このぼくを作ったのは八年だけではない。ぼくの父、母の生きてきた人生も多数の原子からなるい伝子となつて組み込まれているのだ。さらに言えば、両親のそのまた両親、つまりぼくの祖父父母、そのまた両親、とさかのぼると、ぼくの生きてきた八年だけではないとてつもなく長い年月がぼくの中にあるのだと気付く。

それは人間だけではない。あらゆる生存競争や進化によつてさまざまな生物たちが生きのびて現在にたどり着いたのだ。そしてそのたびに、そのかんきょうにてき応するように形を変えていったのだ。

ぼくが公園で木登りをしたくなるのは、昔木で生活していたからだ。母に「木に登ったらだめだよ。」と言われても、「これはぼくだけが登っているのではなく、百三十八億年前から組み込まれているい伝子が登りたがっているのだよ。」と言える。

ぼくが友達と遊びたくなるのも、プールで泳ぎたくなるのも、工作がしたくなるのも、ヒーローが好きなのも、みんな原子から今にいたる過去のぼくがやってきたことだから。

この本は上野にある国立科学博物館の地球史ナビゲーターから生まれた本だ。そこでぼくは実さいに行つて様々な事を学んだ。

ぼくたち生物だけでなく、普段使っているランドセルや靴、本や鉛筆などもすべて原子からできているのだ。食べ物もそう。宇宙誕生とともに出来た原子。それらが集まり、星が生まれ、星々が誕生と死を繰り返すたびに元素が生まれていき、この地球自身も元素からなるの

だ。

宇宙が誕生したのが百三十八億年前、太陽系の星が最初に誕生したのが四十六億年前。こんなにも長い時間をかけた星々のたん生と死のくり返しでぼくは作られているのだ。多くの種に分かれて進化してきた生物たちが様々なかんきょうにてき応し、どく自の形たいや生活様式を持ちながらおたがいに深く関わり合つて生きている姿が見られる。

ぼく自身も、必ず誰かと何かと関わりながら生きていく。たった一人では生きられないのだ。それは百三十八億年前の原子だったところからそうだったように。

さて、百三十八億年経つて現在まできたけれど、まだ世の中は続いていくのだ。つまり、この先のぼくの知る未来、さらにその先のぼくも知ることができない未来はどうなっていくのだろうか。ぼくの好きな海の生物たちはこの先どんな進化をとげるのだろうか。さらに宇宙に目を向けると、有人型人工衛星でもっと宇宙のことが知れるかも知れない。

ぼくの細ぼう一つ一つに、ぼくの経験がつみ重なつてきざまれていく。そしてそのすべてが子孫へと受けつがれていく。今のぼくが未来へとつながっているのだから、未来にほこれる生き方をしようと思う。

書名 一三八〇〇〇〇〇〇〇ねんきみのたび

著者名 坂井 治

発行所 光文社